

第4回フォトフォーラム

「行動する写真家 - 3人」

平成22年10月2日(土) 有楽町朝日ホール

主催：社団法人日本写真家協会、朝日新聞出版 後援：文化庁

写真家はそれぞれのテーマに燃え写真を撮り続けています。たくさんの人々に想いや心を伝えるとともに、社会への提案者として、あるいは後世への記録係として、社会貢献も果たしています。4回目となるフォトフォーラムには、田沼武能会長のほか、ご自分のテーマを長年に亘って撮り続けてきた野町和嘉氏と水越武氏に登場していただきました。3人の写真家が何をテーマとして定め、何をエネルギーとして行動しているのか、その一端を語っていただきました。



10月2日、(社)日本写真家協会および朝日新聞出版の共催と、文化庁の後援により、第4回フォトフォーラムが東京有楽町の朝日ホールで開催されました。酷暑となった平成22年の夏を忘れさせる秋晴れの日に、ハイアマチュア層を中心とする多くの写真愛好家の参加がありました。

今回は「行動する写真家 - 3人」をテーマに据え、世界的に活躍されている野町和嘉、水越武、田沼武能の3氏を招き、それぞれの講演と、『アサヒカメラ』編集長の奥田明久氏を司会進行役とするパネルディスカッションが行われました。参加者506名

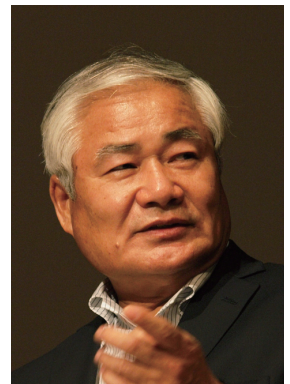
野町和嘉 Nomachi Kazuyoshi 「サハラからはじまった」

25歳のときに友人と二人で初めてサハラを訪れました。「アラビアのロレンス」という感動的な映画があり、どういふところなんだろうと。とはいえ当時はサハラの情報などはほとんどありません。直行ルートがないのでフランスからスペインを経由しモロッコを抜けてアルジェリアのサハラに到着したのですが、地平線にまで及ぶ過酷な砂の世界で人が生きていることが衝撃的かつ新鮮で、この人たちは何を心の糧にして生きているかを知りたくなり、そこから私の旅が始まりました。

その後およそ40年間に亘って、アフリカ、チベット、インド、中東など、さまざまな国や宗教圏を訪れ、ドキュメンタリーを撮ってきました。どこの国や地域でも自然への畏れと神への感謝が常にあり、古くから変わらぬ暮らしや信仰が受け継がれていました。サウジアラビアからの依頼で、メッカとメディナというイスラームの二

大聖地を撮影する機会にも恵まれました。

私の若かった頃は今とは違って日本でもフォトジャーナリズムが生きていて、雑誌の創刊の折などに海外取材の仕事をいただくなど、幸運な時代を過ごさせてもらったと思います。もう還暦も過ぎましたので海外に行く機会も減ってきましたが、それぞれの風土のなかで醸成されてきた人々の姿を、これからも撮り続けていきたいと考えています。



のまち かずよし

1946年高知県生まれ。写真家・杵島隆氏に師事し、1971年にフリーの写真家となる。1972年、20代半ばでサハラ砂漠に旅したことがきっかけとなり、極限の風土を生きる人々の精神世界に魅せられ、信仰、巡礼をテーマとして地球規模で描き続けている。ナイル、エチオピア、グレート・リフト・ヴァレーなどアフリカの乾燥地帯の取材を経て、1980年代後半より舞台を中近東、アジアに移し、中国、チベット、サウジアラビア等での長期取材を重ね、2002年以降アンデス、イラン、インドに取り組んでいる。1984年『ハバル』『サハラ悠遠』で土門拳賞、1990年『長征夢現』『ナイル』で芸術選奨文部大臣新人賞、日本写真協会年度賞、2002年に大同生命地域文化研究特別賞、2009年紫綬褒章、ほかを受賞。他の写真集に『メッカ巡礼』『神よ、エチオピアよ』『チベット』『地球巡礼』『ペルシア』など。これまで8冊の写真集が、英、仏、独、イタリア版などで国際共同出版されている。

水越 武 Mizukoshi Takeshi 「写真は夢や憧れを現実のものとしてくれた」

写真を撮る前から山登りに熱中していて、どこに行けばどういふ情景が見られるか、というイメージはすでに頭の中にありました。それまでの山の写真は判別カメラを使って撮影されたカラー写真が主体でしたが、厳しさや激しさなど山の持っている存在感をモノクロで表現しようと、フットワークの軽い35mmカメラを27歳で購入し、一年の大半をテントや雪洞で暮らしながら、山が織りなす造形を撮り始めました。

モノクロで撮り続けた理由は、単純化や抽象化がしやすいこと、見えないものを見せる力があること、立体感や距離感がカラーよりも優れていること、作品として品格があること、などが挙げられます。

穂高やヒマラヤを10年以上撮ったあとでライチョウに取り組みました。山では生と死が裏腹の関係にあり、自然を通して「命」を撮ってみたいと考えたからです。

その後は日本列島の原生林や東南アジアなど新しいテーマに取り組んできました。そういった活動を通して、環境問題は日本だけではなく地球全体で考える必要があるということ強く感じます。

27歳のときに写真と出会ったことで自分の夢と好奇心が現実のものになりました。ですから写真には強い感謝の気持ちを抱いています。これからも新しいテーマを追いかけ、行動を起こしていきたいと考えています。



みずこし たけし

1938年愛知県豊橋市生まれ。大学を中退後、27歳の時から自然写真の先覚者、田淵行男氏に師事し写真を撮る。穂高岳やヒマラヤなど山岳を中心に撮影。その後、日本の亜寒帯から亜熱帯の原生林を取材する。1993年以後、中南米、アフリカ、東南アジアの熱帯雨林などを撮影する。生態系から見た日本列島などの仕事もある。1991年に写真集『日本の原生林』（岩波書店）で日本写真協会年度賞、1994年に写真集『HIMALAYA』（講談社）で講談社出版文化賞、1999年に写真集『森林列島』（岩波書店）で土門拳賞、写真集『知床 残された原始』（岩波書店）で平成20年度芸術選奨文部科学大臣賞受賞。最近は人の訪れない世界の辺境の地を好んで歩き、熱帯高山の水河の後退など環境問題にテーマを絞って撮影を進めている。2009年に『わたしの山の博物誌』（新潮社）、『熱帯の水河』（山と溪谷社）を出版。

田沼武能 Tanuma Takeyoshi 「子どもに笑顔はよく似合う」

木村伊兵衛先生の助手を務めていたときに、「お前、頼まれ仕事ばかりしていないで、自分の写真も撮らなきゃだめだ」と叱られ、ライフワークということを意識するようになりました。その後、囑託の話があったタイムライフ社の研修が終わり好きなところを回っていいよと言われ、フランスを訪れた折に、プーローニュの森で子どもたちと出会ったことがきっかけとなって、世界の子どもをテーマに撮ろうと決めたのです。

それからは子どもの写真が私の看板になってすっかり子ども写真家にされてしまいましたが、私自身は子どもからお年寄りまで、それぞれの人生を描きながら生きているすべての人間に興味があり、人々のドラマの瞬間を切り取って写真にしています。

さて、世界の人口の65億人のうち、18歳以下の子どもは22億人にのびります。うち87パーセントが発

展途上国に住み、一部の子どもたちは貧困や飢えに苦しんでいます。早魃などに苦しんだ以前とは違って、今は内戦や紛争が原因です。

結局のところ大人が仕掛けたことで子どもたちが犠牲になっています。国が平和でなければ家族の幸せもありませんし、まして子どもたちの幸せも考えられません。

国が平和であり幸せな環境を作ることが大切だと思って写真を撮り続けています。



たぬま たけよし

写真の生命は記録にある。写真を残すことで後世に時代社会を伝えたい。写真の力なくしては出来ないことだ。写真家。文化功労者。1929年東京生まれ。東京写真工業専門学校卒業。木村伊兵衛氏に師事。『芸術新潮』、タイムライフ社囑託などを経て1972年からフリーランスとなる。「世界の子どもたち」をライフワークとして、これまでに120カ国以上の人びとを撮影する。また、日本国内では武蔵野や文士・芸術家の肖像を撮影するなど、幅広い分野で活躍している。主な著書として、『すばらしい子供たち』（1975 朝日新聞社）、『文士』（1979 新潮社）、『東京の戦後』（1993 筑摩書房）、『人間万歳』（2000 クレオ）、『輝く瞳 世界の子ども』（2002 岩波書店）、『60億の肖像』（2004 日本カメラ社）、『難民キャンプの子どもたち』（2005 岩波書店）、『武蔵野讃歌』（2006 ネット武蔵野）『真像残像 ぼくの写真人生』（2008 東京新聞出版局）、『子ども組』（2009 新日本出版）など。（社）日本写真家協会会長。

第2部：3人の写真家による パネルディスカッション

パネリスト

野町和嘉
水越 武
田沼武能

司会：奥田明久（『アサヒカメラ』編集長）

お一人ずつの講演が終わったあと、共催の朝日新聞出版社で『アサヒカメラ』編集長を務める奥田明久氏を司会進行役として、パネルディスカッションが行われました。

奥田 フォトフォーラムも4回目を数えるまでになりました。今回の「行動する写真家」というテーマに関連して、まず3人の先生方の行動力の源泉ともいえる海外取材のエピソードについてお伺いしたいと思います。



田沼 いちばん最初は1957年でモスクワでした。日本が貧乏な時代で、持ち出せる外貨はわずか200ドルでした。その後若い頃は、2ヶ月ほど海外で仕事をして、日本に2ヶ月戻って仕事をする、そのお金でまた海外に行く、という繰り返しでした。借金までしてアンデスに行ったときは帰国してから現像所に払うお金がなくて、持っていたクルマを売ったこともありました。

野町 サハラを訪れ始めた当時は陸路しかルートがなく、まずヨーロッパで四輪駆動車を買って、それから砂漠地帯へと入ってキャンプしながら生活していました。砂漠が持つ、乾き、広がり、透明感といった特性が自分の体質にとっても合ったんですね。キャンプの経験はその後の取材でもずいぶん役立ちました。

水越 私は未知への関心から旅をスタートさせることが多いのですが、何かを知りたいという好奇心と、写真を撮ることは、比重としては同じです。ですから、たとえば途中でお金がなくなったとしても、そこで諦めて帰ってくるのは嫌で、どうしても予定を完結したいと考えて現地で機材を売り払ったことさえあります。

奥田 田沼さんはタイムライフ社から休暇をもらったときにパリで子どもたちを撮ったのがライフワークへのきっかけだったと先ほど話をされていましたが、子どもを撮る面白さはどんなところにありますか。



田沼 人間的な魅力でしようね。みんな目がきらきら輝いているし、自分が感じたことを丸ごとぶつけてきますよね。常に好奇心を持って生きていますから、すごく魅力がありますね。

奥田 野町さんはテーマのひとつとしてイスラム世界に取り組まれています。彼らの中にまで入り込んで取材をするのはとても難しいのではないのでしょうか。

野町 メッカとメディアという二大聖地の取材は常識的に考えたら絶対に不可能です。幸運なことに、私の写真を見たサウジアラビアのある人物から、モスク内部を除き全部撮影を許可しますよという手紙が1994年に届いて、取材の機会を得ることができました。

奥田 撮影でトラブルになったりしたことは。

野町 しょっちゅうです。取材許可証を取り上げられたこともあります。

奥田 田沼さんは一般の人々を撮る機会が多いわけですが、怒鳴られたりはしませんか。

田沼 文句を言われるときもありますよ。その瞬間はもう人間なんて撮るのはやめようかと思うんですけど、



霧のなかの沐浴、インド、2007年

撮影：野町和嘉

ものの数分も経ってまた面白いことが起これば、言われたことなど忘れて夢中になって撮っちゃいますけどね。

奥田 水越さんは、自然の激しさや存在感を表現したいとのことでしたね。

水越 確かにそういう仕事の積み重ねでこれまでやってきました。ただ先ほど控え室で田沼先生から、お前それは自分のことを撮ってきたんだよと指摘されまして、なるほどなと感じた次第です。



奥田 ところで、お三方とも一貫したテーマをお持ちになっていますが、スランプに陥るときはありますか。

田沼 年中ですよ (笑い)。ひとつのことばかり考えていると撮れなくなるので、二つか三つのテーマを並行に進めています。右がスランプになったら左に行くなど、逃げ道を考えながらやっていますね。

野町 スランプをどう表現するかにもよりますが、若い頃とは違って、自分で自分の背中を押す力が少し弱くなったかなと感じることはあります。それと、日本では雑誌がほぼ壊滅状態となったことで、読者との接点が減ってきたのはやはり寂しく思いますね。

水越 好奇心がなくなってしまうたら多分スランプに陥ると思います。今までやってきたんですから、健康管理も含めて、最後まで元気でやっていきたいなと。

奥田 この10年ほどの間にフィルムはあつという間にデジタルに取って代わられました。皆さんはどのようにデジタルに取り組んでいらっしゃいますか。

野町 インドなどでは未明や日没後に撮影をすることが多いため、高感度が使えらるデジタルに2005年に全面的に切り替えました。海外のエージェントに作品を提供するときにもデジタルのほうが楽ですから。

田沼 デジタルは便利ではあるのですが、銀塩世代から見ると、データはちゃんと保存できているのだろうか、将来もちゃんと出力が保証されるのだろうか、という心配はあります。あまり信用していない、というのが正直なところですよ。



ヒマラヤ、夏の氷河

撮影：水越 武

奥田 水越さんは今でもフィルムでしたね。

水越 高山帯に棲むライチョウは個体数が激減しているため、今のうちにと思い、2年ほど前からデジタルでライチョウの再撮影を始めています。これが悔しいくらいに良く写る。これからは、デジタルの良さを生かしながら、フィルムでは撮れなかった生態にも挑戦していきたいと考えています。もちろんフィルムも続けますが。



ヘラートの遊牧民キャンプ内テント教室で学ぶ女子生徒。アフガニスタン
2001年 撮影：田沼武能

奥田 最後に、今日の参加者の皆さんに向けて、行動する写真家としてのメッセージや、ご自身のこれからの活動について一言お願いします。

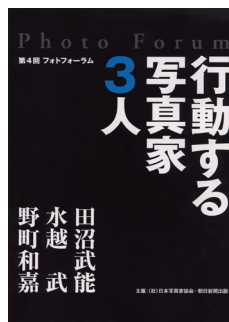
田沼 夢と好奇心がなくなったら人間は終わり、と考えていますので、とにかく夢と好奇心を持ち続けてこれからも頑張っていきます。健康の秘訣については不老長寿の薬がありますが、教えられません (笑い)。



野町 何千年にも亘って受け継がれてきた宗教の形などを見ていると、自分自身に向きあっている人々に出会えます。そういった姿をこれからも追いつけていくことになるでしょう。

水越 本真に行動していくには自分が裸になるしかありません。いい仕事をして、いい写真を撮り続ければ、きっと誰かが見てくれるだろうと信じて、写真を通じて社会や自分が向かっている方向を捉えていきたいと考えています。

奥田 今回話を伺って、お三方ともに、地球的な視野とヒューマン的な温かみを持ちながら、現代文明に対するアンチテーゼを含むメッセージを発信していると感じました。これからも「行動する写真家」としてますますのご活躍をお祈りいたします。ありがとうございました。(10月2日夜、奥田明久氏がフォトフォーラムを終了した後に急逝されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。)



協賛9社による

最新機材・技術展

11:00～18:00 会場ロビーにて開催

協賛：エプソン販売(株)、オリンパスイメージング(株)、キヤノンマーケティングジャパン(株)、(株)シグマ、(株)タムロン、(株)ニコンイメージングジャパン、富士フイルム(株)、HOYA(株)PENTAX イメージング・システム事業部、(株)リコー (50音順)



会場入り口ロビーでは、協賛9社（エプソン販売(株)、オリンパスイメージング(株)、キヤノンマーケティングジャパン(株)、(株)シグマ、(株)タムロン、(株)ニコンイメージングジャパン、富士フイルム(株)、HOYA(株)PENTAX イメージング・システム事業部、(株)リコー）による最新機材・技術展が開かれ、各メーカー

が新製品や主力製品を展示し、多くの来場者がブースで足を止めて担当者から説明を受けていました。

また、日本写真家協会もブースを設け、書籍『スナップ写真のルールとマナー』や写真集『おんな／立ち止まらない女性たち』の販売などが行われました。

(記/関 行宏、撮影/桃井一至・小池良幸)



エプソン販売(株)



オリンパスイメージング(株)



キヤノンマーケティングジャパン(株)



(株)シグマ



(株)タムロン



(株)ニコンイメージングジャパン



富士フイルム(株)



HOYA(株)PENTAX イメージング・システム事業部



(株)リコー